

初等部

2023 年度 「学びの発表会」

初等部 田嶋 健人

本稿では 2023 年度に実施した初等部学びの発表会について報告する。以前より引き続き実施してきた点と今後に向けて変更した点について、今年度の学びの発表会の意図や子どもの様子について紹介する。また翌年以降に向けた課題と展望についても示したい。

1 発表会まで

1-1 2023 年度学びの発表会

前回 2021 年度の学びの発表会では、コロナ禍を経て失われていた協働的な学びを実施することや子どもたちの興味・関心に基づいた主体的な学びを大切にしたいとの思いをもって実施した。

2023 年度、初等部は「みんなで創る」を教育目標としてスタートを切った。それに伴い、12 月に控える学びの発表会についても子どもの思い、教師の思い、どちらか一方ではなく、それぞれの思いを合わせて学習をすすめ、当日を迎えたいことを共有して計画を始めた。また、前回までは 2 年に 1 度の実施だった発表会を毎年の実施とすることとしたため、2 年に 1 度の特別な行事としてではなく、より一層日常の授業やカリキュラムをもとに学びを進めていくことも念頭に置いて実施することになった。

1-2 教職員研修

学びの発表会実施にあたり、教職員の研修も同時に進めた。1-1 でも示した通り、学びの発表会に向けては今もなお改善中であり、これからもより良い会を目指し続けなければならない。それに合わせて教職員も同じように学び続けることが大切だと考え 2021 年度に引き続き教職員研修を実施した。

【教職員探求】

子どもたちと共に探求的な学びを進めていくにあたって、教職員も自己研修として探求に取り組んだ。悉皆ではあるが、在職年数や立場、担当教科などによって、個々に取り組みたい探求課題を設定し、1 年間取り組んできた。中間や終了後の報告会は実施しなかったが、「授業改善」「学級経営」「教室環境整備」など、それぞれの立場や興味に合わせて、自己の研鑽に励んだ。子どもたちと同じように教職員も探求に励むことで子どもだけでなく、学校全体として

共に探求にはげもうという雰囲気の醸成にもつながった。

また、発表会へ向けた学習を通して、どのような子どもを育てたいのかといったことや、学びの発表会のコンセプト、指導方法、テーマの設定の仕方など、教職員で対話を通して深める時間も設定した。一人一人、教職員としての背景や学習歴が違う中で一つの発表会を成功させるために、また、1 年間のカリキュラムも確認しながら各学年の発達にあった目標やテーマ設定をするためにも、教職員全員参加で議論を重ねた。また、目指す子ども像に合わせて適切な発表方法や日程などについても細かく設定をしていった。特に担任は、4 月からの子どもの様子も加味しながら自由学園初等部としてどのような力をつけさせたいのか、どのような学習、発表をさせたいのかという自身の思いも大切にしてきた。

2 児童の様子

2-1 学習の様子

【各学年のテーマ】

- | | |
|-----|----------------------------|
| 1 年 | 「秋をたのしもう」 |
| 2 年 | 「学園のすてきを伝えよう～秋の小さな自ぜんまつり～」 |
| 3 年 | 「ともに生きる」 |
| 4 年 | 「生き物博物館」 |
| 5 年 | 「初等部 5 年生と食」 |
| 6 年 | 「みんなで創る未来の地球」 |

1,2 年生では特に初等部にある自然物を活かして楽しみながら学習に取り組んだ。3 年生以上は社会、理科、夏休みの課題など、既存のカリキュラムから発展する形で各学年のテーマが設定されていることが多かった。講師を招いた授業や体験会など校外の資源とも連携してテーマに関連する学びを深める機会も作ることができた。

教職員は、学びの発表会に向けた取り組みを進めなが

らも先述した対話を欠かさずに行ってきた。組の学習の現状報告と今後の流れについて他の教職員と共有することで、他教科との連携の可能性を探ったり、新たなアイデアを生みだしたりすることに活かした。

2-2 当日の様子

前回 2021 年度の発表会では感染症対策が必要な側面もあり、全学年が体育館をローテーションで使用した。時間ごとに使用する学年を区切り、見学者も入れ替えを行ったため、体育館に入場する人数ある程度絞ることができ、ゆったりとした空間の中で発表を行うことができた。一方で異学年の児童、保護者の交流が生まれず、発表会を通した学習の広がりがあまり見られない部分が反省として挙げられた。

子ども、大人の交流をさらに生み出し、発表会当日の学びをさらに豊かなものとするために、2023 年度の学びの発表会では、全学年が同時に複数個所で発表することとした。各学年の発表場所をある程度定め、各学年、「前半発表者」「後半発表者」を分けるようにして、それぞれ発表しない時間帯は会場内を見学できるように考慮した。こうすることで、同時に発表する人数が全校の半分となり、ある程度の発表する空間を確保しつつ、発表する児童と発表を聞く児童との間に交流や学びが生まれることを期待した。また見学する大人が全学年の発表を見ることができるようすることで、学年間の学習のつながりや進歩を発見することや、発表会を通した五学年の児童との交流が生まれてほしいと考えた。

① 会場の様子(写真)



2-1-1 会場内の様子(体育館、4 年生)



2-1-2 会場内の様子(体育館、3 年生)

② 展示物(写真)



2-1-3 体育館、学習の記録

③ 保護者向けメッセージ(成田喜一郎先生)

当日はこれまで初等部、また、自由学園全体についてアドバイスをいただいていた成田喜一郎先生(元自由学園副学園長)より保護者へ向けたメッセージをいただいた。

3 成果と課題

① 教職員全員が参加者として試行錯誤できた

一昨年度より引き続き、子どもを中心とし、どのような会が学びの発表会にふさわしいのか教職員で議論を続けることができた。変化の激しい時代においては毎年同じように繰り返していくことだけでなく、こうして毎年変わり続け、検討し続けることが重要であると考えます。初等部全体でより良い会にしていくためにも今後検討をし続けていきたい。

② 高学年の変化

高学年(特に 6 年生)では、一昨年度の学びの発表会から継続性が見られる子どももいた。2 年前の発表会で学んだこと、調べたテーマに関連した探求を 6 年生でも続ける姿が見られたことは、今後学びの発表会を毎年のものとし、継続性を持たせていくことの意義、重要性を実感させられる出来事でもあった。

4 来年度に向けて(課題と展望)

① 2年に一度から毎年の実施へ

2021 年度に検討した通り、2023 年度をスタートとして学びの発表会を1年に1度、毎年継続的に行うこととした。2年に1度であった時は「2年」というある程度の余裕があることがよかった点として挙げられるが、反面、一種「お祭り」のようになってしまい、普段の授業の延長線上から離れてしまっている部分も見受けられた。今後は毎年の開催となるため、より一層日常の学習に根付いた探求的な学びを実施していくことを考えなければならない。それに伴い、「探求」または「探求的な学び」を授業やカリキュラムの中にどのように位置づけて日常的にしていけるか、今後も検討し続けなければならない。

名称についても、毎年の開催とすることで学習内容が大きく変わることが予想されるため、新しい会として名称も変更し来年度以降も継続していくことを検討したい。

② 個人か、学級か(その両方か)

特に高学年でこれまで探求してきたテーマに継続性をもって取り組む児童が見られたことで、学年ごとにテーマを決めて探求に取り組むのではなく、個人が自由にテーマを設定し、個人の中で一貫性をもって毎年取り組んでいくことの重要性についても議論するきっかけとなった。二者択一にするのではなく、クラスで一緒に取り組む探求と、個人探求とを、年間カリキュラムに並列するなど、どちらの良さも取り入れることも合わせて検討していきたい。

③ 探求を活かしたカリキュラム編成

来年度より毎年の発表会を実施としたことで、探求を日常のカリキュラムの中に落とし込んでいく必要がある。既存の校外学習やカリキュラムを再編成し、より単元間のつながりを持たせる、もしくは、探求に合わせて新たな単元を導入するなど、様々な可能性を探りながら新たな初等部のカリキュラムを検討し始める必要がある。「発表会そのものをどうするか」という視点と、「カリキュラム全体の中で発表会をどのように位置づけて無理なく実施していくか」という、2つの視点をもって今後の発表会の改善に力を注いでいきたい。